

スクミノン技術情報

スクミノンの薬効試験成績

速効性 - 1

2000年 愛媛県農業試験場

試験条件

水 深: 5cm

処 理 量: 4kg/10a

供 試 貝 数: 78個体/m²(平均貝高2.6cm、平均貝重5.4g)

経過時間	スクミリンゴガイの状態	
	麻痺状態	死滅(仮死を含む)
30 分後	65.0%	35.0%
24 時間後	—	100%

速効性 - 2

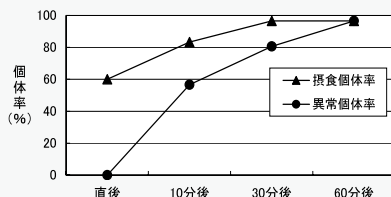
1999年 サンケイ化学(株)

試験条件

試 験 場 所: 鹿児島県現地圃場

試 験 方 法: 3粒をまとめて配置し、5cm離れた位置に貝を放飼

供 試 貝 数: 30個体(現地採集個体)



距離別誘引率

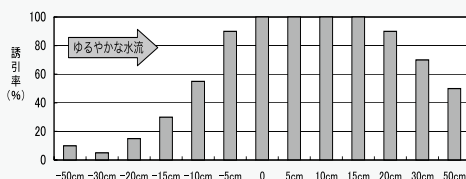
1999年 サンケイ化学(株)

試験条件

試 験 場 所: 鹿児島県現地圃場

試 験 方 法: 3粒をまとめて配置し、所定の距離に貝を放飼

供 試 貝 数: 20個体/区(現地採集個体)



被害防止効果、殺貝率

試 験 場 所: 熊本県農業研究センター農産園芸研究所内圃場

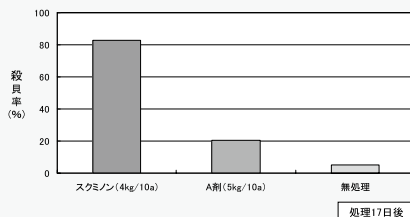
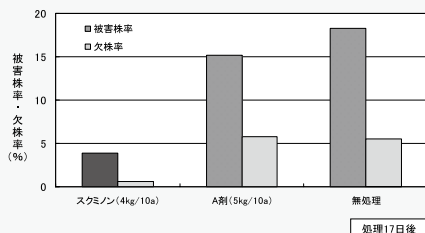
供 試 作 物: 水稻(ユメヒカリ)、播種(5月16日)、移植(6月23日)

処 理 月 日: 6月23日(移植直後)

発 生 程 度: 中発生

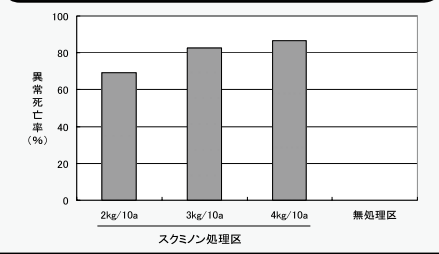
処 理 方 法: 動力散粒機にて均一に処理

調 査 方 法: 試験区内の300m²を選び、定期的に食害株数、欠株数を調査
処理17日後に試験区内のスクミリンゴガイの生死を調査



処理量別の効果

試験 期 間：2008年5月15日～
試験 場 所：鹿児島県霧島市国分準人
試験 区：1区 75頭 15m(3×5m)2連制
試験 条 件：野外試験、マーク貝使用、水深5cm
移 植 日：5月15日、薬剤処理日・放飼日:16日
実 施 機 関：サンケイ化学(株)



スクミリンゴガイ殻高別の効果

平成 9 年 熊本県農業研究センター
試験 期 間：1993年6月23日～
試験 場 所：熊本県農業研究センター
：農産園芸研究所内圃場
移 植 日：6月23日
薬 剤 処 理 日：6月23日(移植直後)

17日後殺貝率

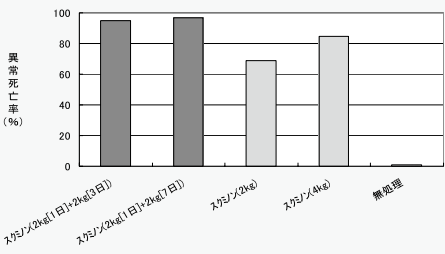
薬剤名	処理量 (/10a)	殻高別殺貝率 (%)			
		0.5 ～ 1.0cm	1.1 ～ 1.5cm	1.6 ～ 2.0cm	2.1 ～ 2.5cm
スクミノン	4kg	75.0	76.0	90.9	100.0
A 剤	5kg	0.0	23.5	18.8	21.4
無処理	—	0.0	6.7	4.9	2.8

追加処理での効果

試験 期 間：2008年5月21日～
試験 場 所：鹿児島県霧島市国分準人
試験 区：1区 75頭 15m(3×5m)2連制
試験 条 件：野外試験、マーク貝使用、水深5cm
移 植 日：5月21日
薬 剤 処 理 日：5月22日
放 飼 日：5月22日
実 施 機 関：サンケイ化学(株)

※図中の記載について
2kg[1日]+2kg[3日]…移植1日後に2kg/10aを散布し、
移植3日後に2kg/10aを再散布したことを示す。
2kg[1日]+2kg[7日]も同様。

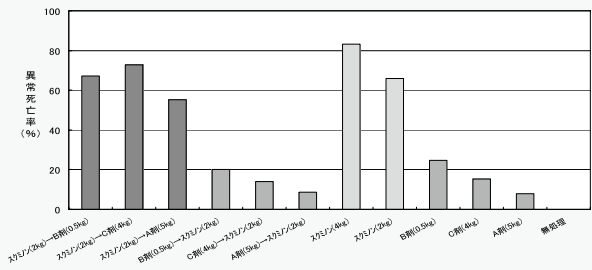
14日後異常死亡率



他スクミリンゴガイ防除剤との前後散布による影響

試験 期 間：2008年5月29日～
試験 場 所：鹿児島県霧島市国分準人
試験 区：1区 75頭 15m(3×5m)2連制
試験 条 件：野外試験、マーク貝使用、水深5cm
移 植 日：5月29日
放 飼 日：5月30日
薬 剤 処 理 日：5月30日・6月4日
実 施 機 関：サンケイ化学(株)

14日後異常死亡率



スクミノン技術情報

スクミリンゴガイの生態

卵

スクミリンゴガイの繁殖時期は4月中旬～10月上旬で、夜間に用水路の壁面や稲などの水面より高いところに産卵します。

卵塊は濃いピンク色で、直径2mm程度の卵が数十～千個あり、一生に数千の卵を産卵します。ふ化までの期間はおよそ2週間(25℃)です。

成長・寿命

ふ化後2～3ヶ月で成貝になり、越冬貝は翌年の春に水田に水が入ると活動を再開します。

寿命は3～5年ですが、水田では比較的短いようです。耕うん作業によって貝殻に傷をつけることがあるので、大きな貝の死亡要因になっています。

環境耐性

乾燥に強く、水が少なくなると土の中に浅く潜り、フタを閉めて水分を維持します。水がなくてもフタを閉めた状態で半年以上生存が可能です。

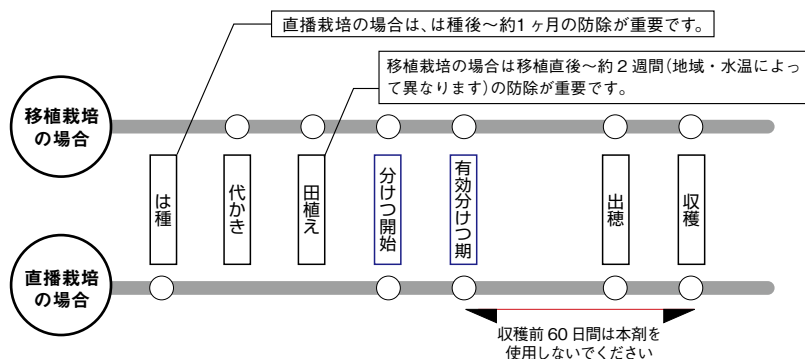
耐寒性は高くないことから、関東以北で分布が広がらない主な要因と考えられています。

食性

主に植物質の餌を摂取しますが、動物質の餌も好みます。柔らかい草を好み、苗がごく小さいうちを除いては稲はそれほど好みません。

稲の被害量は、貝の密度や大きさ、稲の大きさ、水深（移植栽培の場合）や浸水時間（直播栽培の場合）などの影響を受けます。水深が浅いと被害が出にくいようです（およそ水深3cm以下）。

防除時期



本指標は、あくまで分かりやすいよう表記したものであり、実際の管理は地域・品種により異なります。
使用にあたっては登録内容を確認し、収穫前日数の範囲を超えて使用しないよう注意してください。

スクミノン技術情報

使用上の注意事項

湛水状態で使用

スクミリンゴガイを誘引し、摂食させることで効果を発揮しますので、湛水状態で使用してください。

使用時期に注意

移植時の水温が低い場合、効果が十分に発揮されない場合があります（特に早期栽培地区）。
（スクミリンゴガイの生態が要因）⇒ 例年被害の出る時期を見計らって、被害発生前に使用してください。

有用生物に対する影響程度について

スクミノンの生物分類別の影響程度

分類	供試生物	影響程度
腹足類	ヒメタニシ	影響少ない
	カワニナ	影響少ない
	ヒメモノアラガイ	影響少ない
腕足類	アサリ	影響少ない
	シジミ	影響少ない
甲殻類	カイミジンコ	影響少ない
	ホウネンエビ	影響少ない
	カブトエビ	影響少ない
	淡水性カニ（サワガニ）	影響少ない
	アメリカザリガニ	影響少ない
両生類	ニホンアカガエル（オタマジャクシ）	影響少ない
	ヌマガエル（成体）	影響少ない
	アカハライモリ（成体）	影響少ない
昆虫綱	シオカラトンボ（ヤゴ）	影響少ない
	ヒメガムシ	影響少ない
	シマゲンゴロウ	影響少ない
環形動物	イトミミズ	影響少ない

実施機関:サンケイ化学(株)

スクミノンの上手な使い方

おすすめの使用方法

処理量 2kg/10a^{*}、全面散布推奨。散布後は湛水管理。

1回目散布

田植え同時または田植え直後に散布しましょう。
ジャンボタニシは田植え後すぐに摂食を開始します。

2回目散布(発生の多い場合)

圃場内の発生状況を観察しつつ、防除が必要と感じた際に2回目の散布を行ってください。
1回目散布の1週間から10日程度経過した頃を目安に行うことをおすすめします。

※1kg/10aは少発生時、3～4kg/10aは多～甚発生時を想定した登録内容となっておりますので、
圃場密度を確認し、散布量を調整してください。

全面散布して湛水状態を保つ！

① まずは圃場内に生息する個体群を防除！

田植え同時もしくは田植え直後に全面散布することで、圃場全体の密度を低下させ、被害を抑えます。薬剤散布後はすみやかに入水してください。

② 圃場外からの侵入個体を防除！(2回目の散布)

水口または隣接圃場から入ってきた個体や大雨によるオーバーフローによって側溝等から侵入した個体群を防除します。(使用回数制限内)

※本剤は水中でジャンボタニシを誘引し、摂食させることで効果を発揮します。薬剤散布後は湛水状態を維持してください。落水状態では効果が十分に発揮されない場合があります。

多発圃場における田植え同時散布後の状況

移植7日後の状態(薬剤防除なし)



甚大な被害により、大半の稲が
加害された状態→植え直し

左と同一圃場散布19日後



スクミノン(2kg/10a)を全面1回散布(田植え同時)
欠株がほぼ無い状態

ジャンボタニシの防除に苦慮されている方必見！

**浅水(落水)管理による溜まり水への部分散布や、
外周部のみの部分散布では、本剤の力を十分に引き出せていません！**



落水管理中に降雨があり、水溜まりができたところを
加害された状況(写真)

- 浅水管理を行い、溜まり水の部分だけに
薬剤を散布した場合、その中にある個体
は防除できますが、溜まり水に到達でき
なかった多くの個体は一旦土壤中に潜
り、降雨によって水が溜まった際、もし
くは、入水した際に再び表面に出て来て
加害を始めます。
- 外周のみの散布についても同様です。特
に大きな圃場においては中央部付近でも
低くなっている部分（深水になりやすい
部分）は被害が出やすいので、全面散布
することをおすすめします。



ジャンボタニシは水がないと土壤中に潜ります！

ジャンボタニシに対する効果だけではなく、
浅水(落水)管理を行うと水稻除草剤の効果が
不安定になります。湛水状態を保つことは除草効果
を維持することにも繋がります！

行動抑制型のジャンボタニシ防除剤との前後散布に注意！

スクミノンを散布する前に行動抑制型の薬剤（有効成分を水中に溶出させて効果を発揮するタイプ）を処理すると、スクミノンの効果に影響を及ぼす場合があります。

行動抑制型の薬剤の使用により、ジャンボタニシが殻に閉じこもった状態でスクミノンを使用しても、誘引・摂食といった本来の効果を発揮することはできません。

それらの薬剤と体系防除を行う際は、スクミノンを先に散布し、十分に効果を発揮した後で行動抑制型薬剤の使用をおすすめします。